博士論文要旨

本邦曲水宴の総合的研究

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程
り　ぞうせん
李　　増先

本論文は「曲水宴」が本邦に伝来して以来近世期までの間に、いかに享受されてきたのかについて論じたものである。一口に「曲水宴」と言っても、そもそも「曲水宴」は様々な要素で構成されており、どの方面からアプローチし、何を問題視するかによって、研究手法も様々であり、明らかになるものも異なってくる。

まず、曲水宴を執り行うにはしかるべき儀式次第が必要である。即ち、どこで行うのか、どのような条件を整えなければならないのか。その際に、当然手引きとなるものが必要であり、それらを記した儀式書が現存している。第一部（儀礼編）においては、先行研究を踏まえつつ、これらの儀式書に記された曲水宴の儀式次第について考察し、儀式次第と実際に執り行なわれた曲水宴との間には差違があったことを明らかにした。

第二部（文学編）では、曲水宴の席で行われた詩歌の創作について論じた。本邦最古の漢詩集『懐風藻』には、曲水宴の詠作が数首あり、最初の勅撰和歌集『万葉集』にも詠作を確認できる。更に後世の和歌・漢詩集にも詠作が散見され、それらは曲水宴が断続的に開催されてきたことを示唆している。

例えば、連歌・俳諧では、中近世期に座が多く設けられ、その場で詠まれたものをまとめて「〇〇千句」「〇〇百首」のような作品が多見される。一方、曲水宴については、宴席ごとに作品として書き留められた例は、伝存が少ないという現状がある。その上、先行研究もわずかであり、研究史上に空白が生じてきたことは否めない。第二部はその研究史上の空白を埋めるため、伝存する作品を再検討し、考察を深めた。本論文で扱ったのは、平安期の「紀師匠曲水宴和歌」、中世期の「永禄五年一乗谷曲水宴詩歌」、近世期の「享保十七年柳営曲水宴詩歌」の三作品である。

「紀師匠曲水宴和歌」は、延喜初年（十世紀初頭）に、凡河内躬恒・藤原伊衡・紀友則・藤原興風・大江千里・坂上是則・壬生忠岑・紀貫之の八人が一堂に集まり、曲水宴を催した際のものである。本作品の詠歌は『群書類従』和歌部に所収されており、それ以外にも諸本が数本伝存している。本論文はまず、先行研究を踏まえながら、作品の概要や本文の問題について触れた。この作品は一度学界に紹介されて以来、「古今集」撰者四人を含め、当代の有名歌人が一堂に集まったことや、詠歌がそれぞれの私家集に見出されないことを根拠に、偽書説が持ち上げられた。本論文は本作品が後世に与えた影響を中心に、この作品の正当性と存在意義を説いた。

「永禄五年一乗谷曲水宴詩歌」は、『続群書類従』和歌部に所収された作品である。題名に「一乗谷」とある点から、この曲水宴は越前一乗谷を本拠地とした朝倉氏の元で開催されたことがわかる。永禄五年（一五六二）当時、朝倉氏の当主は義景であり、無論この「曲水宴」にも列席し、詠歌を残した。それに加え、時の大覚寺門主の義俊、四辻季遠、飛鳥井雅教等当代一流の文化人も詠歌を残した。この作品の存在は早くから知られていたが、先行研究はいずれも紹介程度に留まっていた。さらに、本来上巳節に由来した曲水宴は、春に開催されるのが一般的であるが、この宴席の開催は永禄五年の「八月廿一日」に開かれた。本論文はまず、この宴席に残された作品の本文の問題を明らかにしてから、本曲水宴の位相の問題にも言及しつつ、この秋に開催された宴席がどのように理解されていたかを考究した。

「享保十七年柳営曲水宴詩歌」は、享保十七年（一七三二）、江戸幕府八代目将軍吉宗の元で、曲水宴が開催された折のものである。その宴席で詠まれた詩歌を伝える諸本は十以上を数えるが、宴席の全貌は伝えられていない。加えて、この作品は諸本によって、開催日も異なっている他、諸本の本文間異同も甚だしい。これらの点は、本作品に改作が加えられている可能性を示唆すると同時に、様々な立場から、本作品に関心が寄せられていたことをも物語っている。これまでに本作品について、先行研究の中では一部の諸本にしか言及されておらず、しかるべき本文も提示されていない。そのため、本論文はまず、現在知り得るこの本作品の全諸本を調査し、その中から適切な底本を選定して提示した。さらに、底本をもとに、全諸本の異同をも示した。加えて、この宴席の開催を任されていた、当時の奥儒者の成島道筑が果した役割をも明らかにした。

曲水宴は年中行事の一つである一方で、それにまつわる逸話や故事も数多く存在する。第三部（寄合としての曲水宴）では、漢故事の一つである「曲水宴」が、本邦でどのように受容されてきたかを、連歌の寄合を切り口として考察した。結果、その受容は単なる漢故事としての受け入れではなく、曲水宴伝来と同時に、本邦に伝わった仏教の典籍、所謂「内典」が深く関わっていたことを明らかにした。

以上のように、本論文は曲水宴の儀式次第、宴席での詠作、漢故事としての曲水宴受容という三つの側面から曲水宴という事柄を考察した。総じて本論文は、本邦における曲水宴の実態と受容の有様について明らかにするとともに、曲水宴のさらなる考究の基盤を提示するものである。